

# 『源氏物語』のスウェーデン語訳について

Stina JELBRING

## I はじめに

今まで、源氏物語全帖が直接日本語からスウェーデン語に訳されたことはないが、アーサー・ウェイリーの英訳の第一部（最初の九帖、『桐壺』～『葵』）から重訳されたことは2度ある。まず、1928年に、アンナスティーナ・アルクマン（Annastina Alkman）、次に、1986年にクリスティーナ・ハッセルグレン（Kristina Hasselgren）。エドワード・サイデンステッカーの源氏物語の新英訳が、1976年にすでに出版されていたにもかかわらず、1986年クリスティーナ・ハッセルグレンは、アーサー・ウェイリーの英訳を基に重訳している。上記二つの翻訳書を基に、次の主要な二点を比較の角度から考察することにより、スウェーデン語訳の評価をしてみたいと思う。

- 1) 一般的な視点から、『源氏物語』がスウェーデンでどのように受け入れられているか、また、特に1928年と1986年の源氏観の違いに注目してみたいと考えている。
- 2) 「帚木三帖」、つまり、第二帖の『帚木』、第三帖の『空蟬』、また、第四帖の『夕顔』の三帖は訳された九帖の中、物語が一貫しているのも、その三帖を中心に、スウェーデン語訳はウェイリー訳や原文と比較して、文章表現がどのように違っているかを検討してみたいと思う。

しかし、翻訳者がどちらの場合も、両者が日本文学者ではなく、『源氏物語』の原文が利用できないという状況なので、実は、英文で書かれた仮原文が原文の役割を果たしているケースであり、実原文と仮原文の存在があると言えるのである。というのは、『源氏物語』の原文との比較は評価の解明のみならず、

和文から英文への誤訳などは、スウェーデン人の翻訳者に責任を負わせることができないことを意味している。また、アーサー・ウェイリーの英訳に関して、も今まで、多くの人によって評価がなされているに対して、私の知るかぎり、『源氏物語』スウェーデン語重訳は新聞記事以外、翻訳評価はいまだにされていない<sup>①</sup>。

従って、『源氏物語』スウェーデン語重訳の評価とは、スウェーデン語の翻訳文が原文の役割を果たしている翻訳文分析を意味しており、実原文、つまり日本語の『源氏物語』の存在がどれぐらい意識されているかは疑問である。というのは、両者のスウェーデン語訳は、翻訳論でいわゆる目的とする翻訳文(target text)が、実原文の内容や平安時代の平安京の環境、当時詠まれた和歌、物語などの、『源氏物語』の最初の読者の教養といえることを、重訳をする訳者が、どれほど考慮して、スウェーデンの読者に理解できるように伝えられたかという問題もふくまれる。

## Ⅱ スウェーデンでの源氏観

スウェーデンでの源氏観というのは、ここでは、『源氏物語』のスウェーデン語重訳とその前書き及び、新聞に書かれた批評や文学史の評価によって伝えられた『源氏物語』がどのように見られているかということを指している。

最初1928年に、英文学翻訳者兼ジャーナリスト・作家のアンナステイーナ・アルクマンによって、アーサー・ウェイリーの英訳からの重訳が『源氏の小説千年前のドン・ファン』として出版された。当時、スウェーデンの大学には日本語学科がなかったため、前書きを書いたのは、中国語学者、ベルナルド・カールグレン(Bernhard Karlgren) イエテボリ大学教授であった上、アーサー・ウェイリーの前書きも省略されたため、かなりのはずれなものであった。カールグレン教授は、日本の文化はほとんど中国の文化からの借りものであると述べ、中国文化の優越性をかなり意識した表現をしている。まずは、西洋の読者にどのように受け入れられたのかを問い、もし「極東の小さな隔離され

た島国」にアメリカのスリル小説を期待するのなら、まこと切望するであろうが、あたらないと述べているが、「東洋人特有の落ち着きをもって紫婦人、つまり紫式部の描写に従っていけば、この作品の特異な魅力に必ずや感動することになる」としている。

カールグレーン教授によると、『源氏物語』のモチーフは単調だが、女性描写、主人公の移ろいやすい精神状態の細やかな表現などはこの作品を世界文学における地位を高いものにしてしている。「東洋の小さな、辺鄙な所に」住んでいた作家の能力に驚くという。次いで、日本の文化について言及し、日本の文化は中国文化に緊密に依存した関係で成立し、七、八世紀にその依存関係が圧倒的なものとなったという。中国の文字を借りて、和歌以外の作品には、中国語を使って書いたという。十一世紀まではほとんど日本語で書かれた作品はなく、あったのはただ中国語の文章を真似したものであると。日本語を文学にしたのは、紫式部であったという。それから、この日本語を西洋の言葉に訳すことについてちょっと言及し、日本語から西洋の言葉に訳した場合、やむを得ず意識せざるをえない翻訳になることを示唆している。そして、最後に紫式部の略歴を述べ、今回の本には最初の九帖しか含まれていないが、この九帖こそ独立した本として読むことができると結んでいる<sup>②</sup>。

一方、1986年に出た『源氏物語』のスウェーデン語訳では解説は翻訳者 Kristina Hasselgren 自身によって解説がなされている。先ず、今日では『源氏物語』という作品は、日本では比類なき古典として見られ、『源氏物語』の研究は盛んで、もちろん『源氏物語』読書会などもあると紹介している。また、アーサー・ウェイリー英訳のあと、最近エドワード・サイデンステッカーによる新英訳が出たことも記述している。けれど、アーサー・ウェイリーの英訳の果たした重要性を強調し、その翻訳のおかげで、『源氏物語』の世界文学の中の占める位置が変わり、世界の散文作品として第一傑作の地位を初めて獲得したという。次いで、物語のジャンルについて語る。散文と和歌の関係について、散文はまず和歌から発展したが、和歌がその短い定型詩の形式をもつことやそ

の曖昧な内容のせいで、逆に和歌に解釈のような文章が必要になり、それが歌物語の成立になったと述べる。それから、次に妙なことに作り物語に和歌が入れられたという。『源氏物語』は写實的に描かれているといっても、主に上級の人間の生活に限られている。また、その上、物の怪や魔術や仏教的無常観と輪廻転生による靈魂の再生信仰も含まれているという。だから、おとぎ話のような要素もあれば、西洋の小説には何百年もあとにしか表れない、多数の人物が登場するという特徴のある物語がすでに出来上がっているという。それから、紫式部の略歴や平安時代女流文学について述べ、アンナステイーナ・アルクマンによる最初のスウェーデン語訳のことにも言及し、特にその副題の『千年前の日本のドン・ファン』について批判している。全体的に誤った印象を与えやすいと言うだけでなく、主人公の光源氏はドン・ファンのように、残酷な人でも冷たい人でもないと。そして、最後にこのスウェーデン語訳はアーサー・ウェイリーの英訳からの重訳ではあるが、もとの日本語の分かりづらさがなんとなく感じられ、スウェーデン語訳の際に非常に苦勞したという。英訳では英語の語彙の豊富さのおかげで、日本語の曖昧さは保たれていたが、スウェーデン語の語彙が少ないため、スウェーデン語訳の文章はより幅が狭く具体的になったきらいがあるという。また、アーサー・ウェイリーの重訳ではあるが、アンナステイーナ・アルクマンのスウェーデン語訳や、エドワード・サイデンステッカーの英訳も参考にしたという。最初の九帖のみのため、タイトルを、『源氏物語——光源氏の若き年月』としている<sup>③</sup>。

新たに訳されたハッセルグレンによる源氏物語九帖は批評家によって、好意的な評価もあれば、かなり厳しい批判も述べられた。好意的な批評では、作家・大学教授のラーシュ・グスタヴソンが、特にスウェーデン語の近代化をほめ、「言葉の面で、より近代的で、より完成した訳文」であるという。内容についても、同氏は、「紫式部の物語は何よりも性愛の記述と分析として心を捕らえる。…だが、少しずつ源氏の君の恋愛変遷は、時代を超越した真実の様相を帯びてくる。千年前の作家の紫式部が成功した愛と性愛の感情的な陰影や

複雑さの描写の方法は不思議に近代的な印象を与える。人物、環境、人生観が我々の時代と離れているものの、紫式部の描写は近代の恋愛小説よりもより精神的に深く染み渡っている」との評価で結ぶ<sup>④</sup>。

一方、批評家カール・ルードベックの批判は新訳に関して厳しいものであった。その批判は、直訳でないことやウェイリーの省略された英訳の使用に関係している。「クリスティーナ・ハッセルグレーンは日本語からスウェーデン語へ直接に訳しておらず、ウェイリー訳から重訳している。従って、意識的で自由な英訳文からのスウェーデン語翻案は原文からだいぶ離れている。それに、原文の一部、つまり五十四帖のうちの九帖しか含んでいない。そのため、『源氏物語』全体を熟知したい者はこの紫式部の傑作の省略された翻案よりも、サイデンステッカーのペンギン版を手に入れた方がいい」と述べる<sup>⑤</sup>。

1990-2000年代になると、スウェーデンでは、『源氏物語』はいずれにしても必ず『世界文学史』に加えられることとなった。1993年に出版された『世界の文学史』で、作家のベント・オルソンとインエマル・アルグリンは、『源氏物語』のことを「小説」というが、エピソード風の物語なので、写実描写に限定があるという。また、長ったらしく、細やかすぎると思われるが、それぞれのエピソードに特定の雰囲気があるともいう。『源氏物語』がマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』と比較されることは珍しくないが、この『文学史』では、ヨーロッパの当時の中世の騎士道の物語との違いや類似点を取り上げており、つまり、両者とも恋愛の緊密な描写がありながら、光源氏はドン・ファンやカサノヴァという人物と違い、『源氏物語』は、暴力や残酷といった下流の描写などのない女性の世界である。また、時間概念が違っていること、つまり、『源氏物語』の時間概念は、輪廻転生という仏教因縁をもとにしているのに、『失われた時を求めて』では、人生が過去で行われた出来事によって決められると考えているという大きな違いがあることも主張している<sup>⑥</sup>。

そして、2000年に出たヨーラン・ヘッグの『世界文学史』でも『源氏物語』の作者を平安宮廷の「文学サークルの天才」と呼び、次に「世界文学において

確実に一番著名で、革新的な作者である」とほめると同時に、『源氏物語』を世界で最初の「小説」として指名している。それに、現在の外国の読者として、まず目につくのは、その「近代性で分かりやすさ」であると述べ、「物語の中で実際におもしろいところは、登場人物の精神的な発展で、親密な感情の微妙な分析がある」としている。そして、『源氏物語』での登場人物のさまざまな視点や同時に並行する物語、そしてその心内語のことを取り上げ、ヨーロッパの文学状況との比較論を行っている<sup>⑦</sup>。

結論として、『源氏物語』のスウェーデン語訳から生ずるスウェーデンでの一般の源氏観として、新聞の批評や文学史の評価をまとめて分かることは、1920年代から、現在に至るにつれ、だんだんドン・ファン論から遠ざかり、より好意的になってきていることが、一般のスウェーデン人にまでも普及したと言える。『源氏物語』は特別有名な作品として知られているわけではないが、特に日本文学者でもない、スウェーデンでの大手朝刊誌の文学批評家が読んで、批評するほど知られた作品であることは確かである。そういった日刊誌や文学史の中の批評では、『源氏物語』の「近代性」や「小説性」をよく主張し、また、文章の写実性、心内語、語り手や登場人物の視点などにも関心が向いている。

スウェーデンでの『源氏物語』の理解はそのスウェーデン語訳が大きな役割を果たしているのは、言うまでもないが、現在では、サイデンステッカーの英訳や、最近訳されたロイヤル・タイラーの英訳もスウェーデン人に読まれている。

さて、以上にさまざまな評価をまとめたが、『源氏物語』のスウェーデン語訳は具体的にどのようななされているのか、次に翻訳文の分析をしてみたいと思う。

### Ⅲ 文章表現の分析—「帯木三帖」を中心に—

以上に述べたごとく、この翻訳分析はふつうのいわゆる原文と目的とする翻訳文の比較論的分析とちょっと離れている。仮原文から翻訳するからといって、

実原文をまったく意識せずに翻訳するわけではないのである。ただ、問題は、どの程度、実原文が翻訳文に影響を与えたか、ということである。その影響というのは、たとえば、スウェーデンの読者のために、平安時代の文化・社会、和歌の引歌などのような原文特有の現象について、仮原文よりも詳しい説明が付いているとか、あるいは、ずいぶん仮原文とはずれている訳文があることなどで示されている。

以上の条件を考慮の上で、次の用語を使用することにした。

実原文→ 日本語文語の『源氏物語』

仮原文→ アーサー・ウェイリーの源氏物語英訳

目的とする翻訳文 I (AA) (以下翻訳文 I (AA) とする。) → アンナステ  
ィーナ・アルクマンの源氏物語スウェーデン語重訳

翻訳文 II (KH) (以下翻訳文 II (KH) とする。) → クリスティーナ・ハッ  
セルグレーンの源氏物語スウェーデン語重訳

スウェーデン語の目的とする翻訳文は『源氏物語』の九帖しか含まれておらず、そのなかで一貫している物語といえは、『帚木三帖』である<sup>⑧</sup>。

しかし、『帚木三帖』は物語が一貫しているからといって、文体も一貫しているとは限らない。実は、文体の多様性を見せている。例えば、「雨夜の品定め」の若い男たちの会話のあと、続く空蟬の物語では空蟬の心内語が目立ち、その後、『夕顔』の帖では、伝統的なおとぎ話構造の様相が多様な視野方法と組み合わせるという特徴がみられる。つまり、さまざまな文体の翻訳の例をあつめていて、元となっているテキスト（コーパス）が限定されていても、代表的な例と言える。文章表現を言語学的・実用的方法による評価、つまり、文法、身分の違いによる階級上の丁寧さのレベル、意味論の点、そして、読者の視点を含めて検証してみたいと思う。

具体的に言えば、文法は、統語法・語彙上の相違を指すが、ここで、一つの

構文を選んで、英語の“and”表現をスウェーデン語でどのように現わされているか、を検討してみたいと思う。言語レベルというのは、人物の身分の階級により、敬語・尊敬語などの使い方のことで、丁寧さのレベルをいう。意味論の点は、五つある。最初の二つは、一番よく翻訳評価で使われている方法で、加筆、つまり、原文にないことを付け加えている方法、及び省略、簡単に言えば、原文にある物事を訳出していない方法である。それから、残りの三つの点とは、翻訳文が原文にどれほど離れているか、意味のニュアンスの違い、不正確、そして、誤訳を指す。最後に、読者の視点、つまり、十一世紀に書かれた『源氏物語』がスウェーデンの二十世紀の読者に理解されるか、翻訳文章の様子とその目的を達すために、正確にできているか、などの実用的な問題を取り扱うが、全体的な評価に関わっているので、終わりの結論に入れる<sup>⑨</sup>。

## 一、文法 — “and” 構文を中心に —

文法構成の“and”表現（と、そして）を選択することによって、スウェーデン語の翻訳文にする場合の二者（アルクマンとハッセルグレンのこと）、それぞれの違った翻訳方法がわかった。翻訳文 I（AA）には所有格化及び副詞化の傾向が強く、翻訳文 II（KH）は逐語訳が普通である。

### 1) 所有格化

実原文（帚木84/3-4）えたもつまじき頼もしげなき方なりける。

仮原文（33/44-45）a comfortless and unprotected life 《慰めのない無防備な生活》（誤訳）

翻訳文 I（AA 46/21）den övergivna<sub>s</sub> värnlösa liv 《すてられた女の防御のすべのない生活》

仮原文が誤訳（頼みにならないのは女の生活ではなく、女自身である）である。英語の“and”を訳さずに、主語を入れて（捨てられた女）、スウェーデン



語の所有格“s”を付け加えての方法を使う。

## 2) 副詞化

実原文（帚木109/6-7）心苦しくも恋しくも思し出づ

仮原文（45/3）filled him with longing and despair 《彼を願望と失望で満たした》

翻訳文 I（AA（66/8-9）underbläste hans förtvivalde längtan 《彼の失望で満ちた願望を激しくした》

実原文（空蟬124/5-6）あやしく夢のやうなること

仮原文（50/22）their one strange and dreamlike meeting 《彼らの唯一の、不思議で、夢のような逢瀬》

翻訳文 I（AA 75/26-27）deras enda underligt drömlika möte 《彼らの唯一の、不思議に夢のような逢瀬》

仮原文で、動詞の《満たす》に平行して、掛かる《願望》と《失望》という構成が、翻訳文では副詞化した《失望で満ちた願望》になったのは、意味のニュアンスからこうなったのは確かであろう。次の例にも《逢瀬》にかかる《不思議で》が副詞化した《夢のよう》にかかる《不思議に》となっているし、また、そのうえ、《満たす》だけではなく、《激しくした》ので、実原文よりも、また、仮原文よりも、主観的、感情的な感じを抱かせている。

## 3) 逐語訳

実原文（帚木109/6-7）心苦しくも恋しくも思し出づ

仮原文（45/3）filled him with longing and despair 《彼を願望と失望で満たした》

翻訳文 II（KH 49/24）fyllde honom med längtan och förtvivilan 《彼を願望と失

望で満たした》

実原文（空蟬124/5-6）あやしく夢のやうなること

仮原文（50/22 their one strange and dreamlike meeting 《彼らの唯一の不思議で  
夢のような逢瀬》

翻訳文Ⅱ（KH 71/19-20）deras enda, underliga och drömlika möte 《彼らの唯  
一の、不思議で、夢のような逢瀬》

そのまま、逐語訳だと、翻訳者の存在が弱くなり、より客観的な態度をとる。

要するに、翻訳文Ⅰ（AA）の方が、翻訳文Ⅱ（KH）よりも文法の面で、多  
様性があり、逐語訳が少ない。“And”表現の場合、翻訳方法として、所有格  
化・副詞化が翻訳文Ⅰ（AA）に目立ち、翻訳者の存在を強くする。

## 二、身分の違いによる階級上の丁寧さのレベル

実原文に動詞などによって、丁寧さのレベルが表わされているのは、言うま  
でまでもないが、英文に丁寧さが動詞よりも、Madame（夫人）、Lady（貴婦  
人）、His Highness（殿下）のような敬称に移って示されているのも確かである。  
スウェーデン語にも同じような現象があり、英語の二人称のyou（あなた、君）  
が、スウェーデン語では、du（普通体）とni（丁寧体）の両方に別れて、丁寧  
さの程度にもう一つの面を加える。ただし、スウェーデンの社会で、duとniを  
区別して使う事が1920年代から1980年代にかけて、だいぶ変化して、niは使わ  
れなくなっている傾向があったのかかわらず、翻訳文Ⅱ（KH）には残って  
いる。だが、英語のMadame（夫人）、Lady（貴婦人）、His Highness（殿下）な  
どはだいたいそのまま翻訳文Ⅰ（AA）に逐語訳されていても、翻訳文Ⅱ（KH）  
では特にHis Highness（殿下）が省略され、別の表現で書かれている。

Niを使うことによって、源氏が空蟬に近づいている丁寧な感じが表わされて  
いる。というのは、源氏も空蟬にたいしてniを使うし、空蟬も源氏にもいうの

で、相互的に丁寧語を使っているということである。また、中将の君も惟光源氏に対してniを使いながら、源氏は惟光にduを使う。一方、頭中将は源氏にduを使い、友達・兄弟関係を主張し、夕顔と源氏の親密な関係にもniが両者から欠けている。

敬称に誤訳がある場合については、以下の「誤訳」を参照。

### 三、意味論の点

翻訳文評価の意味論的な五つの点は以上に加筆・省略・意味のニュアンスの違い・不正確・誤訳と述べたが、加筆は、あるいは、原文にない意味を付け加えている例の中には、補足、また説明の付いている逐語訳も包含している。省略は、完全な省略もあれば、部分的な省略もある。それから、意味のニュアンスだと、別表現での置換や逸脱などが含まれる。不正確はまったく誤った表現ではないが、イメージが原文とだいぶ離れている場合をさし、誤訳といえ、はっきり誤った訳をいう。

#### 三、一 加筆

加筆は両方の翻訳文に見られるが、翻訳文 I (AA) には、和歌の訳の加筆及び意味のニュアンスの違いが目立ちながらも、翻訳文 II (KH) には、物語がなめらかにいくための補足文がよく見られる。両方に見られることではあるが、より翻訳文 I (AA) の特徴と言えるのは、英語の poem (詩、日本語の「和歌」を指しているが) を訳している場合、liten 《小さい、短い》を付け加えていることである。

実原文 (帚木75/9) 歌も詠まず

仮原文 (30/9) : sent no poem 《なんの詩もよこさなかった》

翻訳文 I (AA 39/32) : ej sänt mig något litet poem 《なんの短いっぺんの詩も僕によこしてない》

翻訳文Ⅱ (KH 44/25) : inte sänt mig [...] någon liten dikt 《短い詩もよこしてない》

実原文 (夕顔139/14-15) をかしうすさび書きたり。

仮原文 (56/8-9) : a poem carelessly but elegantly scribbled 《無雑作そうだが、優雅に書き記された詩》

翻訳文Ⅰ (AA 84/17) : en liten strof som hastigt, men icke utan elegans kastats ned på dess vita yta 《優雅ではないとはいえないが、無雑作そうに白い表面に書き記された短い一節》

実原文 (夕顔148)

仮原文 (59/25) : the poem 《詩》 (加筆)

翻訳文Ⅰ (AA 90/11) : en liten dikt 《短い詩》

翻訳文Ⅱ (KH 83/24) : en liten dikt 《短い詩》

あるいは、「短い詩」が別表現で表わされ、たとえばpoem《一遍の詩》、strof《一節》で、または付け加えた文章でいう。

仮原文 (帚木30/9) : sent no poem 《なんの詩もよこさなかった》

翻訳文Ⅰ (AA 39/32) : ej sänt mig något litet poem 《なんの短いいっぺんの詩も僕によこしてない》

仮原文 (夕顔56/8-9) : a poem carelessly but elegantly scribbled 《無雑作そうだが、優雅に書き記された詩》

翻訳文Ⅰ (AA 84/17) : en liten strof som hastigt, men icke utan elegans kastats ned på dess vita yta 《優雅ではないとはいえないが、無雑作そうに白い表面に書き記された短い一節》

仮原文 (46/12) : and sent it to her 《そして、彼女によこした》

翻訳文 I (AA 68/11-12) : Han skrev genast ned de flyktiga raderna och sände dem till henne 《彼はすぐに即興的な詩を書き記して、彼女によこした》

また、アルクマンの翻訳文には、ちょっとした特徴があり、en smula (ちょっと、少し) という表現が、多く使われている。英文で書かれた仮原文と比べても、余分に加筆されている傾向があり、より多く使われ、一般的なスウェーデン語で書かれた作品と比較しても多いという特徴がある。

実原文 (帚木110/9) うち叩かせなどせむに、ほど離れてを

仮原文 (AW 45/27) : would have liked to be massaged; I must go where there is more room 《マッサージがほしかった。私は空間があるところに行かなければならない》

翻訳文 I (AA 67/4-5) : att jag kan behöva en smula massage. Jag måste skaffa mig en smula mer utrymme. 《マッサージがちょっと必要なの。私はもうちよっと空間を得なければならない》

そして、和歌の訳に関して、仮原文と違って、韻律も添えてある。次の例に、スウェーデン語の韻は太文字で、加筆が一本下線で示してある。

実原文 (夕顔141/5-6) 第二の歌・源氏

寄りてこそそれかとぞ見めたそがれにほのほのみつる花の夕顔

仮原文 (AW 56/32-34) : could I but get a closer view, no longer would they puzzle me – the flowers that all too dimly in the gathering dusk i saw. 《もしもと近くに見ることができたら、混乱させなかつただろうに一たそがれにほのほのと見た花》

翻訳文 I (AA 85/18-20) : O, finge den blomman jag se—som skymtat i skymningen grå—och finge jag andas dess doft—dess gåta nog löste jag då. 《ああ、あの花を見たら—あの灰色の夕暮に微かに見えた花／また、その香も嗅げば、その謎をきつととけるでしょう》

もしウェイリー訳が実原文の意識であれば、アルクマン訳はウェイリー仮原文の意識といえるほど、翻訳者自身が創造して翻訳したか、翻案したかの、文章である。《その香も嗅げば》は明確に詩文のリズムのため付け加えられたものだが、原文とだいぶ離れている。

上記に述べたごとく、翻訳文 II (KH) で加筆に関しては、物語がなめらかになるように、付け加えられたといえるであろう。

実原文 (帚木74/11-13) など言ひしろひはべりしかど、まことには変わるべきこととも思ひたまへずながら、日ごろ経るまで消息も遣はさずあくがれまかり歩くに、

仮原文 (29/34-36) : After a few words I left her, not for a moment thinking that all was over. “Days went by, and no news. I began to be restless. [《もうちょっと言い合ってから、僕は別れることになったのを全然考えずに彼女のところを離れた。「それから日々が過ぎても何の便りもなかった。不安になり始めた。】》

翻訳文 II (KH 44/1-4) : “[...]” Efter ytterligare någon ordväxling gick jag utan att ens snudda vid tanken på att allt var förbi. “Uma no Kami gjorde en paus. Sedan fortsatte han:” Dagarna gick utan att hon hördes av. Jag började bli orolig. 《もうちょっと言い合ってから、僕はすべてが終わったとまったく考えずに行ってしまった。》 馬の頭が話を切った。それから続いた。「彼女の便りが来ないまま日々がすぎてしまった。僕は不安になり始めた。」》

文章の意味をはっきりさせるために、添えた言葉という方法が両方に見られるが、それらは訳者の主観的な解釈になりやすい。

実原文（帚木60/9-10）なにがしが及ぶべきほどならねば、

仮原文（24/8-9）：But she would certainly be beyond the reach of a humble person like myself 《しかし、彼女は確かに僕のような卑しい人の能力外だ》

翻訳文 I（AA 29/12）：Men hon är nog tyvärr utom räckhåll för en så obetydlig person som jag 《しかし、彼女は残念ながら僕のような卑しい人の能力外だ》

実原文（帚木78/7）池水かけ見えて

仮原文（31/17）：I saw the shadowy waters of the lake 《わたしは湖の微かな水を見た》

翻訳文 I（AA 42/6）：såg jag trädgårdsdammens dunkla vatten glittra 《私は庭の池の微かな水がきらきら光っているのを見た》

実原文（帚木87-88）

仮原文（35/29）：acrostic 《アクロステイック》（加筆）

翻訳文 I（AA 49/16）：ett känt akrostikon 《よく知られているアクロステイック》

翻訳文 II（KH 51/30）：en känd dikt 《よく知られている詩》

実原文（帚木88/7）さすがに口疾くなどははべりき

仮原文（35/34）：concealed the meaning 《意味を隠した》（意味のニュアンスの違い）

翻訳文 II（KH 52/2）：den besvikna undermeningen 《失望した隠れている意味》

実原文（帚木109/12）方の忌待ち出でたまふ。

仮原文（45/10）：the unfavourable posture of the stars 《星の不運な位置》

翻訳文 I（AA 66/18-19）：stjärnornas ofördelaktiga konstellation och hejdade sig 《不運な星位を…、引き止めた》

結論として言えば、翻訳文 I（AA）には、加筆方法は詩のリズムを保つための添えた文章があれば、仮原文にはっきり書いていないが、読み入れた意味をスウェーデンの目的の読者に明確に分かるように、説明及び強調のような修飾として表わしていることも少なくない。また、そのような言葉を主観的に及び使いすぎの傾向もある。それに反して、翻訳文 II（KH）には、加筆は和歌の訳にほとんど表わさず、むしろ引用句や引用に関わっている文章を添えることが多い。

### 三、二 省略

省略という方法は両者の翻訳文に見られるが、加筆などよりも少ない。

実原文（帚木78/2-4）内裏よりまかではべりに、ある上人来あひて、…大納言の家にまかりとまらむとするに、

仮原文（AW 31/12-13）：As I was leaving the Palace I met a certain young courtier, who, when I told him that I was driving out to spend the night at the Dainagon's 《宮中から退出いたしながら、ある若い殿上人に出会って、僕が大納言の家に行って泊まろうと言うと、》

翻訳文 II（KH 46/4-5）：mötte jag en ung hovman just när jag lämnade Palatset.  
《宮中から退出いたしながら、若い殿上人に出会った》

どこに行こうと、つまり《大納言》のことを除いて、若い殿上人に出会った



とだけ生かしている。また、次の例に読者に分かりづらそうな《盤渉調》のことを避けて、ただ《(箏の琴を) 調べて》と簡単に訳して、どのような曲調であるかを生かさないうままにつづく。

実原文(帚木79/12) 盤渉調に調べて

仮原文(AW 32/9) : tuning it to the *Banjiki* mode 《盤渉調(バンシキチョウ)に調べて》(バンジキではなく、バンシキという)

翻訳文Ⅱ(KH 47/15) : stämde den 《(箏の琴を) 調べて》

上記の二つの例が示しているように、ウェイリー訳の全体的省略がなく、分かりにくいと思われるところなのか、その部分だけが省略されていることがある。

### 三、三 意味のニュアンスの違い及び不正確

意味のニュアンスの違いは、和歌の訳にも表れるが、平安時代の建物、服装などの文化現象がウェイリー訳で曖昧に訳されて、また説明も僅しか付いていないためか、スウェーデン語訳に原文とかなりはずれている感じがするのは、不思議ではない。この意味のニュアンスが仮原文及び実原文と全体的にまったく異なるイメージを生かすとすれば、われわれは不正確だと言えるであろう。

その結果、翻訳文Ⅰに平安時代を生かしたイメージが弱く、むしろ詩的で、欧州ローマン主義的雰囲気がかかっているように思われる。

実原文(帚木78/12) 懐

仮原文(AW 31/25) : the folds of his dress 《服の折り目》

翻訳文Ⅰ(AA 42/18) : mantelns veck 《マントの折り目》

実原文(帚木119/3) 東の妻戸

仮原文 (AW 48/1) : in the porch of the double-door 《二枚開き戸の玄関で》  
(加筆)

翻訳文 I (AA 71/23) : i pelargången utanför östra flygelns dubbeldörr 《東の対  
の二枚開きの外にある柱郎の中で》

実原文 (空蟬128/3) 渡殿

仮原文 (AW 52/9) : corridor 《渡り廊下》

翻訳文 I (AA 78/19) : arkaden 《アーケード》

実原文 (帚木91/14-15) 御几帳隔てておはしまして

仮原文 (AW 37/16-17) : standing behind the curtain 《帳の向こうに佇んで》

翻訳文 I (52/13) : från andra sidan dörrdraperiet 《ドアの掛け布の向こうから》

それに反して、翻訳文 II (KH) が近代化した言葉を使うが、平安時代の雰囲  
気を生かしているかどうかは、まだ問題が残る。

実原文 (帚木78/12) 懐

仮原文 (AW 31/25) : the folds of his dress 《服の折り目》

翻訳文 II (AA 46/19) : vecken på sin klädnad 《服の折り目》

実原文 (帚木119/3) 東の妻戸

仮原文 (AW 48/1) : in the porch of the double-door of the eastern wing 《二枚開  
き戸の玄関》 (加筆)

翻訳文 II (AA 68/13) : på verandan utanför östra flygelns dubbeldörr 《東の対の  
二枚開き戸の外にあるベランダで》

実原文 (空蟬128/3) 渡殿

仮原文 (AW 52/9) : corridor 《渡り廊下》

翻訳文Ⅱ (KH 73/28) : korridoren 《渡り廊下》

実原文 (帚木91/14-15) 御几帳隔てておはしまして

仮原文 (AW 37/16-17) : standing behind the curtain 《帳の向こうに佇んで》

翻訳文ii (53/36) : andra sidan dörrdraperiet 《ドアの掛け布の向こうに》

また、欧州化した現象は建物、服装のようなものに限られていない。例えば、宗教にも関わる。

実原文 (帚木66/4-5) 仏もなかなか心ぎたなしと見たまひつべし。

仮原文 (AW 26/24-25) : she took her vows 《願をかけた》 (加筆)

翻訳文Ⅰ (33/14) : hon tog slöjan 《ベールを掛けた》

《願をかける》ことも《ベールを掛ける》ことも両者とも修道院に入って、尼になることをさすのだが、翻訳文にキリスト教の尼の姿が描かれているのは、原書の仏教の尼の姿とは異なっている。

そして、和歌の訳し方、以上にも述べたように、翻訳文Ⅰ (AA) では、意訳が一般的に行われており、韻律もついているので、夕顔の帖にある、源氏の「咲く花に」の歌の中の「花」が、「薔薇」となっている。

実原文 (夕顔 第三の歌・源氏148/3-4)

咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔

仮原文 (AW 59/26-27) : “Though I would not be thought to wander heedlessly  
from flower to flower, yet this morning’s pale convolvulous I fain would pluck”

《花から花へ気をつけずに歩きまわっていることに思われなたくなくても、今朝の蒼白い朝顔は喜んで摘み取る》

翻訳文 I (AA 90/11-14) : “Tro ej att mitt väsen är att skynda—från ros till **ros** ;  
—fast denna morgons bleka åkervinda—jag vill dröja **hos** !” 《バラからバラへ  
急いでいくのがわが性質であると思わないでくれ～今朝の蒼白い朝顔のと  
ころにはゆっくりしたいのですが》

また、敬称のことだが、六条御息所を、仮原文で、princess Rokujo 《六条王  
女》にしてあるのに対して、スウェーデン語訳になぜか分からないが、だいた  
いgrevinnan Rokujo/Rokujoo 《六条伯爵夫人》としているのにもかかわらず、あ  
る箇所には、prinsessan Rokujo/Rokujoo 《六条王女》という表現も使っている。  
実に難所とみられるのは、「帚木」の帖にある。

実原文 (帚木57/3) 生ひ先籠れる窓の内なるほど

仮原文 (AW22/28) These have been since childhood guarded behind lattice  
windows 《子供時代から窓格子の内に保護されている》

翻訳文 I (AA 24/26) : De har under uppväxtåren bevakats bakom galler 《成長  
期に横木の内に警視されている》

翻訳文 I のスウェーデン語訳はなんとなく刑務所の窓格子を連想させるだろう。  
幸いに、翻訳文 II ではこの誤ったイメージは、訂正されている。

翻訳文 II (KH 34/39-35/1) : De har under uppväxtåren skyddats bakom  
gallerfönster 《成長期に窓格子の内に保護されている》

### 三、四 誤訳

英語を誤解して、誤った訳をしたのは、両者の翻訳文に見られる。まず、英  
語の “world” が問題となる。

実原文（帚木57/5）粉るることなきほど

仮原文（AW 22/31）has not yet mixed at all with the world 《まだ世間に交際が全然ない》

翻訳文 I（AA 26/28-29）har ännu inte kommit i beröring med världens ondska 《まだ世界の悪にふれていない》

翻訳文 II（KH 35/4-5）hae ännu inte med världens ondska 《まだ世界の悪にふれていない》

実原文の『粉るることなきほど』は、日本古典文学全集の『源氏物語』によると、『粉る』とは、「ほかのことに気をとられたり、手をとられたりすること。結婚前の女の様」で、つまり、結婚して、子供の世話などがあるので、未婚の生活のように、遊びなどができなくなるという。それに対して、スウェーデン語で、《世間に交際がない》とは、《世界の悪》と解釈して、誤訳されている。

実原文（帚木71/2）法の師の、世のことわり説き聞かせむ所の心地する

仮原文（AW 28/13）was indeed very much like a chaplain's sermon about the ways of the world 《実にこの世の習わしについて説教する牧師によく似ていた》

翻訳文 I（AA 36/22）påminde starkt om en salvelsefull präst som predikar om denna världens ondska 《ねこなでな牧師がこの世の悪について説教することを実に思いださせる》

翻訳文 II（KH 41/35）liknade mycket en predikan över denna världens ondska 《この世の悪についての説教によく似ていた》

その他に、さまざまな誤訳がある。たとえば、もとの意味「古言」が古い歌という意味なのに、英語の“allusion”が「思いつき」のように解釈される。

実原文（帚木89/13-14）をかしき古言をもはじめよりとりこみつつ  
仮原文（36/20） make use of some happy allusion 《趣のある隠喩を使う》  
翻訳文Ⅰ（AA 50/33） utnyttja ett lyckligt infall 《幸運な思いつきを使用する》  
翻訳文Ⅱ（KH 52/34） lyckligt infall 《幸運な思いつき》

英語の“private affairs”《私事》がなぜか、《商事》として誤解された。

実原文（帚木89/5）世にあることの公私につけて  
仮原文（36/5） public and private affairs 《世間の公事私事について》  
翻訳文Ⅰ（AA 50/10-11） allmänna angelägenheter, vare sig i politik eller  
affärsliv 《公事、政治でも、商事でも》  
翻訳文Ⅱ（KH 52/16-27） offentliga angelägenheter eller i affärsliv 《公事及び  
商事》

また、英語の“Lady”が召使い、女房にも使えるので、葵の上づきの女房である「中納言の君」の身分を「伯爵夫人」にしてしまう。

実原文（帚木91/11）中納言の君  
仮原文（37/13） Lady Chunagon 《中納言夫人》  
翻訳文Ⅰ（AA 52/8） grevinnan Chunagon 《中納言伯爵夫人》  
翻訳文Ⅱ（KH 53/32） grevinnan Chunagon 《中納言伯爵夫人》

そして、抽象的な現象が具体的なものになってしまうこともある。抽象的、精神的な人間関係の状態のことをいう《ようやく達した段階》が、《場所》として理解して訳された。

実原文（夕顔161/11）かばかりにて

仮原文（66/1-2）the stage at which they had now arrived 《ようやく達した段階》

翻訳文Ⅰ（AA 100/28）den plats där de nu vistades 《現在逗留している場所》

翻訳文Ⅱ（KH 92/14）plats där de nu var 《現在いる場所》

#### Ⅳ 結論

この小論文では、まず、『源氏物語』がスウェーデンでどのように受け入れられたか、を簡単に説明し、次に『源氏物語』の二つのスウェーデン語訳の評価を行った。

1920年代にスウェーデンでほとんど無知の作品としての存在から、『源氏物語』は現在高い評価を占めて来ている。1986年に、最初の九帖のウェイリー訳がスウェーデン語の新訳となったとき、スウェーデンの大手新聞で批評され、また、それ以前にも、『源氏物語』が新聞の文化欄にも文学史にも論じられたことはあった。

翻訳文評価に関して、最初に訳されたときにも、あらたに訳されたときにも、直接に訳さず、英語の重訳であったので、翻訳評価の普通の場合と違って、スウェーデン語のいわゆる目的とする翻訳文が日本語のいわゆる原文と直接比較できず、翻訳論の特有の問題が生じた。それにも関わらず、翻訳文Ⅱである1986年に出版された源氏訳が、(日本文学者に相談した結果)、日本の原文もスウェーデン語の翻訳文の表現にちょっとした役割を果たしていることもあるし、また、評価に日本語原文との相違点の解明のため、翻訳論の通常用語、原文 (source text) 対翻訳文 (target text) が、実原文 (real source text) 対仮原文 (preliminary source text) という新しい用語が紹介された。

両者のスウェーデン語訳は一般の読者に向け、速やかに読めるように出来ている。また、それぞれの特徴を要約すると、次のようになる。

翻訳文 I (AA)	翻訳文 II (KH)
廃語	現代語
感情的、詩的、ローマン主義用語の使用	話す言葉
動詞の複数形	動詞の複数形がない
昔の日本語の翻字の表記	昔と現代の翻字の混同
長母音を表記せぬ	長母音を二重母音字で表記する (例。とうのちゅうじょう→Too no Chuujo; 現在はôの方が通常)
韻文と散文とが語彙的に違う	韻文と散文が語彙的にあまり違わぬ
韻文は引用符で示す	韻文は五行で示す
“and” 表現を副詞化及び所有格化する傾向	“and” 表現を逐語訳とする傾向

結論として言えば、現代のスウェーデンの読者として、翻訳文 I (AA) が、古めかしい表現を使っていると言っても、翻訳文 II (KH) に比べて、翻訳者の独特の創造力があり、アルクマン源氏というような言い方が可能である。一方、翻訳文 II (KH) には、実原文の存在がかなり強く、ところどころ、ウェイリーの誤訳を訂正しながらも、だいたい、ウェイリー英訳の文章に緊密に逐語訳している。

#### 文献

- Gustafsson, Lars, “En modern tusenåring”, *Nerikes Allehanda* 86-12-30. [ラーシュ・グスタヴソン『近代的な千年の物語』「ネーリケ雑報」1986年12月30日]
- Hägg, Göran, *Världens litteraturhistoria*. Wahlström & Widstrand, Stockholm, 2000 [ハッグ・ヨーラン『世界文学史』ストックホルム：ワールストルム・ウィードストランド社 2000年]
- Ingo, Rune, *Från källspråk till målspråk: introduktion i översättningsvetenskap*. Lund: Studentlitteratur, 1991 [ルーネ・インゴ『原語から目的語へ 翻訳論への紹介』ルンド：スチューデントリッテラチュール社 1991年]
- 紫式部
  - 『源氏物語』 新編日本古典文学全集20 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳 東京：小学館 1994年
  - *Genjis roman. En japansk Don Juan får 1000 år sedan*, transl. Annastina Alkman. Stockholm: Natur & Kultur, 1928. [紫式部『源氏の小説 千年前の日本のドン・ファン』アンナステイーナ・アルクマン訳 スtockホルム：ナチュラル・クルチュール社 1928年]



- *Berättelsen om Genji. De tidiga åren*, transl. Kristina Hasselgren. Stockholm: Natur & Kultur, 1986. [紫式部 『源氏物語--光源氏の若き年月』クリスティーナ・ハッセルグレン訳 ストックホルム：ナチュール・クルチュール社 1986年]
- *The Tale of Genji*, transl. Arthur Waley. Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1970 [『源氏物語』アーサー・ウェイリー訳 チャールス E. タトル社 1970年]
- Olsson, Bernt & Algulin, Ingemar, *Litteraturens historia i världen*. Stockholm: Norstedts (1993), 113. [ベント・オルソンとインエマル・アルグリン 『世界の文学史』ストックホルム：ノールステットス社 1993年]
- Rudbeck, Carl, "Frihandstolkning", *Svenska Dagbladet* 86-12-22. [ルードベック・カール 『自由翻案』「スウェーデン朝刊紙」1986年12月22日]
- 武田孝「アーサー・ウェイリーの源氏物語訳」『近代の享受と海外との交流』源氏物語講座9 東京：勉誠社 平成4年

[注]

- ①例えば、武田孝「アーサー・ウェイリーの源氏物語訳」『近代の享受と海外との交流』源氏物語講座9 (勉誠社 平成4年) 11-21頁などを参照。
- ②Murasaki Shikibu, *Genjis roman. En japansk Don Juan för 1000 år sedan*, transl. Annastina Alkman. Stockholm: 1928. [紫式部 『源氏の小説 千年前の日本のドン・ファン』アンナスティーナ・アルクマン訳 ストックホルム：ナチュール・クルチュール社 1928年] V-Ⅷ頁
- ③Murasaki Shikibu, *Berättelsen om Genji. De tidiga åren*, transl. Kristina Hasselgren. Stockholm: Natur & Kultur, 1986. [紫式部 『源氏物語--光源氏の若き年月』クリスティーナ・ハッセルグレン訳 ストックホルム：ナチュール・クルチュール社 1986年] 7-13頁
- ④Lars Gustafsson, "En modern tusenåring", *Nerikes Allehanda* 86-12-30. [ラーシュ・グスタフソン『近代的な千年の物語』「ネーリケ雑報」1986年12月30日]
- ⑤Carl Rudbeck, "Frihandstolkning", *Svenska Dagbladet* 86-12-22. [カール・ルードベック『自由翻案』「スウェーデン朝刊紙」1986年12月22日]
- ⑥Bernt Olsson & Ingmar Algulin, *Litteraturens historia i världen*. Stockholm: Norstedts, 1993, 113. [ベント・オルソンとインエマル・アルグリン 『世界の文学史』ストックホルム：ノールステットス 1993年] 113頁
- ⑦Göran Hägg, *Världens litteraturhistoria*. Stockholm: Wahlström & Widstrand, 2000, 159-164. [ヨーラン・ヘッグ 『世界文学史』ストックホルム：ワールストルム・ウィードストランド社 2000年] 159-164頁
- ⑧これら現分析は次のテキストが元となっている。
- 紫式部；『源氏物語』小学館 新編日本古典文学全集20 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳 東京：小学館 1994年 「帯木」53~113頁、「空蟬」117~131頁、「夕顔」135~196頁
- Murasaki Shikibu, *Genjis roman. En japansk Don Juan för 1000 år sedan*, transl. Annastina Alkman. Stockholm: Natur & Kultur, 1928. [紫式部 『源氏の小説 千年前の日本のドン・ファン』アンナスティーナ・アルクマン訳 ストックホルム：ナチュール・クルチュール社 1928年], "Inledning" V-Ⅷ, "Kap. II. Hahakigi," 24-69, "Kap. III. Utsusemi," 70-80, "Kap. IV. Yugao," 81-

125. [「前書き」V-VIII頁、「第二課帚木」24～69頁、「第三課空蟬」70～80頁、「第四課夕顔」81～125頁]

○Murasaki Shikibu, *Berättelsen om Genji. De tidiga åren*, transl. Kristina Hasselgren. Stockholm: Natur & Kultur, 1986. [紫式部 『源氏物語--光源氏の若き年月』クリスティーナ・ハッセルグレン訳 ストックホルム：ナチュラル・クルチュール社 1986年] “Berättelsen om Genji-En bakgrund, 7-13, “Kvassträdet,” 33-66, “Utsusemi,” 67-75, “Yuugao,” 76-112. [『源氏物語-その背景』7～13頁、「帚木」33～66頁、「空蟬」67～75頁、「夕顔」76～112頁]

○*The Tale of Genji*, transl. Arthur Waley. Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1970, “The Broom-Tree,” 21-46, “Utsusemi,” 47-53, “Yûgao,” 54-80. [『源氏物語』アーサー・ウェイリー訳 チャールズ E. タトル社 1970年] 「帚木」21～40頁、「空蟬」47～53頁、「夕顔」54～80頁]

⑨この言語的・実用的方法はルーネ・インゴ、フィンランド語教授、翻訳者教育担当者による。Rune Ingo, *Från källspråk till målspråk: introduktion i översättningsvetenskap*. Lund: Studentlitteratur, 1991. (ルーネ・インゴ 『原語から目的語へ 翻訳論への紹介』ルンド：スチューデントリッテラチュール社 1991年) 246-259頁

#### \* 討議要旨

村尾誠一氏から、世界文学史の中の『源氏物語』についての評価は興味深い、その中で扱われている本文は、スウェーデン語のものであったか英語のものであったか、また、英語からスウェーデン語に翻訳する際英語の「poem」に短いを意味する「litet」が加筆されたことは興味深とし、スウェーデン語の二つの翻訳の「poem」「dikt」はどういう違いのある語かという質問がなされた。発表者は最初の質問に対しては英語であると答え、後の質問に対しては「dikt」は英語の「poem」という意味に相当しスウェーデン語の「poem」は一編の詩という意味であると解説した。伊藤鉄也氏からはスウェーデン語訳の入手方法について質問があった。発表者は、1928年版は入手不可能であることを述べた。